

公益財団法人 樫の芽会 御中

令和6年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		①作成日	令和 7年 3月 1日
②法人・団体名	特定非営利活動法人 Learning for All		
③団体所在地 (都道府県・市町村名で)	東京都新宿区		
④責任者氏名	李 炯植	(役職名等)	代表
⑤担当者氏名	穀田 莉央	(役職名等)	子ども支援事業部 学習支援事業マネージャー

【奨学活動の概要】					
⑥助成交付決定番号	R06-045	⑦助成金額	100万円	⑧申請カテゴリ	FS
⑨奨学活動名	経済的困窮や不登校など困難な環境にいる子どもたちへの個別学習支援事業				
⑩主な実施場所名・ 及びその住所	お花茶屋市区センター (〒124-0003 東京都葛飾区お花茶屋2丁目1-12 葛飾区お花茶屋地区センター) など				

⑪活動内容とその成果の概要(詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。)

東京都葛飾区に住む小学4年生~高校4年生で、経済的困窮や不登校など困難な環境にあり、学習ニーズがある子供と世帯を対象に、①学習支援、②安心空間の提供、③保護者支援、④関係機関連携を実施した。週2回(水曜18:00-20:00、土曜13:00-17:00)開室し、子ども1-2名に対しボランティアの大学生がつき、個別で指導にあたった。登録がある子ども全員に対し、習熟度や学習環境、本人の希望に合わせた中長期的な目標を定め、当該目標を達成するために必要な個別カリキュラムとコミュニケーションプランを作成し、毎回の指導は当該カリキュラム、コミュニケーションプランに準じて行った。

令和7年3月1日時点での実績は以下の通りである。

- ・登録者(サービス受益者):16名(小学生4名、中学生10名、高校生2名)
- ・開室回数:89回
- ・支援回数:のべ352名
- ・進学実績:中学生4名のうち、4名が校入試を受験し、4名が合格。
高校生2名のうち、2名が大学入試を受験。2名が合格。

⑫奨学活動の定量的把握(注:統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式3-2等でご報告願います。)

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (AxB)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	216	2	432	10名(子ども数)×2h(指導時間)×4週×9か月×0.6(出席率6割)
高校生等	43.2	2	86.4	2名(子ども数)×2h(指導時間)×4週×9か月×0.6(出席率6割)
大学生等	0	0	0	募集していないため
学習支援員等			2,508	①土曜(プログラム)ボラ10人×14h(指導4h+準備10h)×44週×出席率6割=1848 ②水曜(プログラム外)ボラ5人×5h(指導2h+準備3h)×44週×出席率6割=660 ①②③の合計を活動量として記載
その他 (職員)			1,152	①拠点長:1週あたり週40h×2/5(週2)×4週×9か月 ②マネージャー:1週あたり週40h×1/5(週1)×4週×9か月 ③ソーシャルワーカー:1週あたり週40h×1/5(週1)×4週×9か月 ①②③の合計を活動量として記載
合 計			4,178.4	

⑬その他の定量的な数値(任意)

- ・保護者へのサポート (*保護者面談、保護者の相談対応(電話、関係機関同行、SNSでの情報提供など):37回
- ・SWerのケース対応 (*上記以外の子ども本人に関するケース対応、関係機関連携、情報対応など):60回
- ・学生のプログラム満足度
学生ボランティアに対する事後アンケートでは、高い満足度を示す結果が見られた
 - ・本プログラムに参加した目的は達成されましたか?:8.5/10
 - ・子どもとの指導・関わりにおいて楽しさや学びがありましたか?:9.8/10
 - ・プログラムを通し、自分自身の気づきや学び、変化はありましたか?:9.5/10

令和6年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：

法人・団体名：特定非営利活動法人 Learning for All
 作成者 氏名：穀田莉央

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

東京都葛飾区に住む小学4年生～高校4年生で、経済的困窮や不登校など困難な環境にあり、学習ニーズがある子供と世帯を対象に、①学習支援、②安心空間の提供、③保護者支援、④関係機関連携を実施した。週2回（水曜18:00-20:00、土曜13:00-17:00）開室し、子ども1～2名に対しボランティアの大学生が付き、個別で指導にあたった。登録がある子ども全員に対し、習熟度や学習環境、本人の希望に合わせた中長期的な目標を定め、当該目標を達成するために必要な個別カリキュラムとコミュニケーションプランを作成し、毎回の指導は当該カリキュラム、コミュニケーションプランに準じて行った。（カリキュラム、コミュニケーションプランは現状をふまえ3か月に1回見直しを実施した）

2. 実施した奨学活動の詳細

令和7年3月1日時点での実績は以下の通りである。

【学習支援の実施内容】

〈登録者（サービス受益者）〉16名（小学生4名、中学生10名、高校生2名）

〈開室回数〉89回

〈支援回数〉のべ352回

〈進学実績〉中学生4名のうち、4名が校入試を受験し、4名が合格。

高校生2名のうち、2名が大学入試を受験。2名が合格。

〈学習支援中の子どもたちの様子〉

子どもたちが自分たちのペースややりかたを大事にしながら学習に向き合った1年であった。象徴的なエピソードとしては、不登校で家でも学習する時間がほぼなく、数年の学習遅滞がある中学生の子どもが、毎週漢字練習に取り組み、1学年分の学ぶ量を覚えることができたことをあげる。

上記のエピソードの中で意識した関わり方や声掛けなどとしては、以下3点である

- ・発達に特性のある子どもだったため、マスの中に漢字を書くことが難しいことがあったが、漢字の形をより正確に捉えることができるように、マスを色分けした。
- ・学習の前後で子どものしたい話を一緒に話す時間も設けることで、できるだけポジティブなメンタルで学習に向き合えるよう工夫をした。
- ・前回の学習内容のテストを行うことで、未定着の漢字を取りこぼさないようにした。

【保護者支援、関係機関連携】

〈保護者へのサポート（*保護者面談、保護者の相談対応（電話、関係機関同行、保護者への情報提供など））〉37回

〈SWerのケース対応（*上記以外の子ども本人に関するケース対応、関係機関連携、情報対応など）〉60回

〈保護者支援、関係機関連携での学びや課題〉

子どもたちが安心して学習に取り組めるため、生活上の困難を個人や家族が主体的に解決していけるように援助することの必要性に気づいた1年だった。特に本拠点では外国ルーツで生活保護を受給している子どもの奨学金対応（本人・保護者への情報提供、相談、関係機関との連携、進学先の大学や奨学金申請先への確認など）で30件以上の対応が発生し、困難を抱える子どもの進路支援や奨学金申請のサポートの重要性を感じた。特に、日本の奨学金制度が複雑で分からない、学校には相談しづらい、受験勉強と平行して本人が実施しなければならないことが多いなどの課題が見えてきた。また、学習支援と訪問支援を併用している世帯に週に1回、半年間の20回以上訪問支援を続けることで状況が改善した事例もあり、学習支援拠点だけで勉強を教えるのではなく、他サービスや関係機関とつながり、世帯を支援する必要性を感じた。

【大学生に対するボランティアプログラム】

〈学生のプログラム参加人数〉

・延べ人数：256名

〈学生のプログラム満足度〉

学生ボランティアに対する事後アンケートでは、高い満足度を示す結果が見られた

- ・本プログラムに参加した目的は達成されましたか？：8.5/10
- ・子どもとの指導・関わりにおいて楽しさや学びがありましたか？：9.8/10
- ・プログラムを通し、自分自身の気づきや学び、変化はありましたか？：9.5/10

〈学生の声〉

参加した学生からは以下のような感想が聞かれた。大学生に対するボランティアプログラムに参加する前と参加したあとで、「子どもの貧困」への理解が深まった様子や新たな価値観や発想に出会えたことが分かった。

・学習支援においては私たちは教える立場にあり、子どもたちは教えられる立場にあるので、私たちがやる内容を決

めて用意しなければならないと思っていたが、子どもたちと一緒に考えながら決めていいんだと気づいた。そうすることで子どもと対等な関係を気づくことができるのだなと思った。

・研修の中でほかの教師の方やスタッフの皆さんと話し合いをする中で、自分にはなかった価値観や発想をとりこむことができたから。

【地域連携】

当団体の支援だけでなく、地域全体が子どもたちを支え、より子どもが生きやすい環境を作ることを目指し、地域のコミュニティ作りと経済的困窮世帯への生活支援を実施している。以下にそれぞれの活動の詳細を記載する。

〈フードパントリー〉

月1回、フードパントリーを開催し、令和7年3月1日時点、のべX名が参加した。

子ども同士が登録拠点を越えて関わる姿、子どもと地域の人に関わる姿などが見られ、多くの交流が生まれた。また、学習支援拠点に来る子どもの保護者や、子どもの兄弟姉妹に会うことができ、近況や家庭の様子などをキャッチすることや、世帯の相談に乗ることにおいても、フードパントリーでの交流が役立っている。

〈地域住民と実施した、子どもの権利について学ぶ学習会の様子〉

地域の子どもの支援団体や地域住民とともに、子どもの権利に関する団体『子どもの権利かつしからいつ』を立ち上げた。全体会議では、今後の活動の展開の仕方について話し合いを行い、子どもの権利を保障する場を作るチーム、子どもの権利を広める・学ぶチーム、子どもの声を聴くチームが発足した。今後それぞれの活動がより主体的に動いていくことで、地域全体が、子どもの権利を意識しながら子どもを見守れる地域になっていくのではないかなと思われる。

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

〈ソーシャルワーカーの対応の必要性〉

保護者支援、関係機関連携での学びにも記載の通り、子どもたちが安心して学習に取り組めるように、生活上の困難を個人や家族が主体的に解決していけるように援助すること、すなわち「ケース対応」の必要性に気づいた1年だった。高校生世代の進路・奨学金申請サポートや訪問支援、関係機関との連携をはじめとして、各ケースにおいて子どもたちとのつながりが強化でき、一人一人に沿った本当に必要な支援を届けられたと考えている。次年度以降も今年同様に、学習の支援はもちろんだが、ソーシャルワーカーとの連携も含めた学習前段の部分からの困りごとの解消と学習に集中できる環境づくりをサポートをしていきたい。

〈高校生の進路支援と自立準備支援〉

高校生世代の進路・奨学金申請サポートの必要性や、拠点を卒業してから困りを抱えるケースがあったこと等をふまえ、子どもたちが自立に必要なスキルやマインドを獲得するための支援として、自立準備支援を実施することを予定している。具体的には奨学金に対する説明会、一人暮らしに必要なスキルを獲得するためのイベント等を予定している。

〈今後の継続性(政策提言)について〉

学習支援事業では、目の前の子どもに寄り添う拠点運営を行うと同時に、葛飾区全体の経済的困窮や不登校など困難な環境にあり、学習ニーズがある子供に対する学習支援をより良いものに変えていくことをゴールとしており、今年度は葛飾子ども若者計画への提言を行った。本提案により、困難を抱える子どもたちの居場所やそのニーズの見直しなど、子どもを地域で支える仕組みを区と協働して進めていく体制ができつつあることは成果であるといえる。学習支援事業に関しても、引き続き、子どもたちの困りやニーズを自治体に対して伝え、葛飾区全体で「学習ニーズがある困難な子どもたちを区と協働して支える仕組み」を作ることを目指していく。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等(任意)

※上記2の「実施した奨学活動の詳細」に記載。

5. 学識者からのご意見、コメント、等(申請カテゴリにて「S」が付されている団体)

※会計士・税理士による監査報告書の添付を予定しているため、「C・D 会計報告書の提出」の際に添付予定